枇杷園句集

乾

帝國圖書館藏

士朗先生以刀圭餘暇纂蓋
翁之風雅亡危無馬能為
之塗抹市中常趨紅塵實
不在四寶皆有名南蘭菜
樹一枝赤松擎擢比鄰而
同枇杷園疎雨簷下茶

陳四絃の殊音を聴かば或
称琵琶の人小曲録事
黄鶴の高望山頂
猿山の新月影斜度樹
光千里の煙雲
疎ベト美世賞一殊共存

下故に未嘗て高会費極須
度又嘗て嘆而帰先生
之聲業ヒ之勝相美
此集男字細樹少蓋雨
字洋松見不解也業
理朱序セヨト之願年先生

[illegible]

[illegible]

文化甲子秋 [illegible]

[illegible] 白井

枇杷園句集巻之一

春

年内立春

[illegible]

歳旦

何度もおくて春待あしこゝ

元日の白

松の[illegible]ちつほけもなく苔の春

住吉しくさうの社の十歩

賀

小しはむや千くさ年の春しき

若菜

老らはむ為の菜をひとのもらひける

古のひらふる

芝ちはの磯のゐもとを 梅為菜

萩

睦月廿四日

ゆくへ知らぬ杉村を尋ねぶらふを

この手き菴あるを廿日の西とと

ひへるうきしるやうを萩を手

おもひ出

世ワすれに萩手らん月と梅

梅

伏山な月白ら春来るうめの花

苔きれいな梅を見ながら
江の上や二人してをる梅のもと
白梅の大きなるを中ゝなる

筑州山底のさび秋枝氏

求よ高しこゝろ忘れすな
ゆふ夏を

弱のいとも香よ白ひるを梅の苔
きゝをきゝ人のまろうめを食

九岳亭

うめゝや霧の中まて掃ちきり

神東はるゝ

貫之のうゝのまくらそうめの苔
梅ゝやうゝけなくて青月花

芭蕉翁肖像開眼

眼も鼻も口もひゝ男ゝへ

月前

かゝる世もあるべき影や蓮木のうめの花

暮雨苦法會

苔むしハうかの墓傍の白ひう耶

五十八山の巖六十八山の半腹もとの

山路大波よハあれてそろ〳〵

まぬるに從て素さもるセ

山よ如るさ寺あるも梅の下結ひ

警

ほゝ水し嶋中警寺し峰の松

警に雲の〳〵るゆの屋のな

伸のしさめそ只巡るのさろ小

小の小庭にるの来り

寺りと庭掃のをとの

警をもたれも

警をもたれな梅ふ塀〳〵〳〵

蛍の声清閑の小志つゝれて
とこてやら蛍なきぬる夏の月

柳

きゝ柳ほろ〳〵き世の塵ハあらぬ行
伊勢よて

きゝ柳のあめや小あのひとゝ口

きゝ柳やく暮て帰殘淀の犬
矢刻よて

きゝ柳の東西ハ百里この那
多草

わかれの句なしゝゆる塘
霞

小ゝ家のほくゝふゆくゝ弘
古きるのさゝんなるぬ朝ゝ
初頃

胡螺貝の初味よとゝる蕨ゝな

雪

たるの雪ゑだをたわめぬ枝もなし

旅人よ雪ハこゝふまもまちの戸

出山して

消のこる雪もあるかの借り

雪間

大佛のあめをゆくくたる亀

雪風

明日も有ん雪ゆゑ有ん雪の風

雪風や雪のたゝかたてゝる擔うさ

仰雪

仰雪を洗しさゝのとしらさき

ゆくゝゝや仏ゝ雪ふりとゝ雪ふり

雪月

雪の月雑炊雪ゑる所仏きぬ

雪の月松ゑこゝ亜弗おろす

糊すあるを見るうちに也来の月

花

しくやせるやとの影一詩

起くるや花見るやとの業けり

花来るを花と見てこそ目さまれ

所とはるかはるて

あのもちの庵やさくるさびうつ

虎見菴

ひくくかを見てあれを花る樗哉

芭蕉堂新成矣

肖像安置しまりて

蜍なるもうかやあけちり花のみ

贈吳井

よさかかいひくきえのよ花のみ

宇津の山ふるる

よきほとたに花のうけある山路哉

四半とき許芭蕉人の来るころなり

芳野行

甲子吟行に曰ひとりよりみて行ろ
たとうるにたゞこゝに山深く白雲
峰に立てり烟霞谷を埋んでなを出
色出るゝ其雨ふるも降雪おほつゝ
なき欠をを分入るとくくみ
清水のとくくに流るをちこちに

山をくるる清水に此雨り菴のさま
清水のやうを見るとくくの言
んよりひさ芭蕉なる花神樓清し
芭蕉なのさ石三所宮世そうそも
そのうゑひとるを思ひ出るを仏を
さくこ石ふ立ける立ハ仏から
方ひ来るうも清水をけうへ分と
並をまとに常住の月清うう金

いとしきみてらぬ屋し
世を捨てあるとく　さらの　山路か

嵐山

松さくら一木置ちりあくし山
花ちるまもしくハさぬ嵯峨の宿
ぬきて見ハ嵯峨よゆきて
洛ちかくなりてとおりへ花のけ

木母寺

花よ鉢いうもなる罪ハほろふらん
ニ年ぶりに母の見やるのかりそり

眉山の苔見むとて豊宮崎の文庫
をとをる小に深ぬる山村に至る
うの目神ふ分入る山のやそ道や
とさへおもふ花ハ
苔の木にむすぶ見る菴も

帰路

ちかのうらいひくくもとる山路哉

さくらの花ハ波紋の花ちやる

波やよらちやとてやしらるひゆく

ちるとしやるあるはさせうの亭波の

神宮ら詣つ

焼塩の亭波のさくら

ふりうる

玉垂行

玉垂のやうをみるたちつかるを鄭

しうる林しうを用ふる多農

桜ふ情ふの山居にむせふるれつれる

林しうさんさんれを鄭ハ二ヶ

用ハ百千にわらる百千にあるる人形

多のしうを寺況や一ヨあるふ人をや

世のうきまちら住まるとうや住る人

すやあんちいさき松の菴ホ文机の外
見るものなくかさ〻ね同じさまし
坐る僧のありけるが茶を煮るいと
ある人なて宿らせたまふとはへとも
見坐るのこゝろこるものもいをすら
やはらしき標とそこの戸は扉なて
花のもしきもふもはちさるや
はて坐おふんとかくまを待ぬ

はへはかれしゆすとてのるはぶた
有る僧の戸をさしこめさるをそ
はてをおろそ庵れ日を要発
かゝれこるを見るものを紙くしく
小倉の山ゆをゝき木の宿

ゝゝちる

鶏夜やおほつかなくとゝもたん
と口ずさみ侍れこの僧のおもりこる

菜のよく茂りて三尺の侍るをもちゐて
むくらの門をとざしたるいとなみくさの色ち
いつもぬ

涅槃會

あれはてに見てるふるさとハ佛弟
道人のあつまりて申さぬ涅槃像
新買に伸くひとをへを設さん哉

紫苑

紫の色なる大名なる林檎の事

桂亭

紫の色にてあるすもあり柿元
かくれひろれとも頭すあるを
さセるうきも見てすゑ雀ハ
えんたんなるす

紫の色にロナてあるの常雀
梅ゑ肥ゑ紫の色吸ふ多るもなし

籔入

籔入や小さき笠をうちはづす

帰鳳

三尺二度あらはるゝ丈山

西湖

いま一度雪ふる籔よ冬ごもり

然谷よて

ゐるこしよ入る然谷典 唐このち

蟬

花ゆすらとゝまれば蟬伸きを蟬と思ふ

堂

あみ目こゝろみはけし人形をこほろ

几巾

風巾うけうるさみ一きれの桂弐

桂

信ゝ花せとあのうゝきを信桂

人もふえのハつもふてるの山ゑ弘

燕

ひゑ農係よ毛ゑらぬ小白ゆゑ
陰木ゆ中を燕の往来弘

雉

かへ里来ゑる帝ゆ焼の雉の尋
ほろゝとハ苑ゑ雉ゑく柏ゑ哉
ゑゑつ里してハみゑゝきて哉

幻住菴ゑて

松ゆゑの雉ゆへゑと菴のあゑ

雛

ひなのかゑる苑のうゆまとこてゑゑ
すめゑゑ毛ゑるや雛の膳まつり

桃

伏見ゑと日ゑられて来ゑうゑの苑

以下　久能山の歌ども

ゆく末をふるさとゆくはるかな

藤

藤のさかりなるくもうかとあるかな

寒半日碁をうちあるし半日碁を失ふされば碁ハうきものと

小屋の窓よりもひるまの雪に

ゆしたりし後世菩提の修行者

碁をうるに皆をとをしハ碁盤ハ

菴のうちに松の枝折ふるふる半日

の楽ハ主人もゆるしまふ屋し遊

琴に琴を弾て月をのを友とすと

ふるのわらをへ

山藤の枯すもしみし住居ハ

題しらず

ぬるはりを踏る米みろう玉の居
父母のあるをうを仏にをくすめ
義しき砌に小松のみとるが
月花を待る見えれた松の風
花とりやさらてもけをみろう

善光寺に西おこもりをする人の

会傳の寄ハヤ風身あくひるるおひ
半てし正明見体に見れい老さる
ひと生たるるまたに佛の手をとふも
まあてそと見伸抜ちれまる
元の袖ちたらふちしさもをくよろ
かひおたる拜兵集しるるそかけ
ちき

朝れく風掃おそれ堂うち

暮春

あさ〳〵ハこそし玉ゆく蔦の門
ゆく玉をあきれむ行の日影

椿堂輯

枇杷園句集巻之三

夏

更衣

ゝふ〳〵ハ父のもの着ん更衣

老懶

文云人のきしきにおとろかぬ
和のたゝかもしらるゝ姫ゆゝ男ゝ

時雨

義しきやうるのひとおれ
ひとあす思ひ捨ても月花の事
むらの面いまも降りまさるを時雨
住うしの橋うるうるひとおれ
みたやまの所か三ツもあれ時雨

嵯峨提山嵯峨堂にて

会佛を米かむやうにほとおれ

ある日宵の内一ちのひとおれ
大草はの月の風雲雨こゝひ岩
月弱高のはてみるのほとおすの
来屋さきしきりとて二三の人
例の瓢携来て松下の陰に蟹の足
かうちうしあ
迎ふい誰をやらをひとおれ

名葉

奉さらやいつて之をさらら名葉

れ堂殿ふるる

れ堂前をつくる榊のつら葉載

茂

うくひす所の前こむ茂る武

清佛

尾芭ら崎をゆきるる所

かるはるに松ゆくひとの跡絶

そもむらの上に花堂しるる

芭蕉堂をたきさへうら

笠はるるる佛をうら海をみる

行る 蜻蛉

まるみのるやて供奉てこむ寺の門

明るさた仏のるをうふおるる

伊勢ら来はきのふら弥ら蜻蛉

牡丹

ちゝ〳〵ふく牡丹つりこむ堀の内

當茶

又六代當茶 ぬくる山あらな

枝子

白きに窮屈らなきしあらな

あゝしるこうの又咲おろうの花

苔花

苔生あるやあ苔咲ぬ蕗もちぬ

諫鼓鳥

宋太祖すゝ茶まし了よ茶の毋

敷帳

連日のあめ毋

日出くるまえの

麻をこしえの

俳ひろふやすめあるもく敷屋のか

雪

方の野やま大井原をゆくみち

粽

此廠やむかしなつかのさと　粽

ふるさとにいくらもみとくちまき哉

五月雨

五月雨のいとせふ陸あき　外かな

萱津の里

さみだれやめて屋の場る雨ふ

栗手の虎

ひとつ毎つ蹲るの白さとも月百

竹酔日

半ば穂る日もひとの来る拍子色

外ふるうつまさ拍子ふるる苔のもれ

井ぬきし庭をと人の住居もまさ形く俗

なりゆくかいにしへ人のての業を
さし学んで俄に小さき机を拵られたるに
におすりろをとかりまるたのもしく
半とけうるに来る良きる帰るを武
まき田
まき田
むすこ石屋さてハふゆくさ屋
うゑて去る山田を麻の色うれる

いセ吉兵衛来り茶店あるふ
田を植ひとりもうへぬいさらハ
松さのふるる
雨ちの垣梟ゆけハまき田うち
小雛
さ田よへハこれお帰れるハつるの門
古井のさと雨と風と亭まて
ゆうせ小雛の小田ゆふ

蛍頃花
蛍頃色やうやくこもるの小窓を
ゆらぬ
ゆらぬやもうけ色の老の杖
鄙川
待ぬやもなくくるるゆく鄙舟
余花山の麓小立ちの
静のかりぬ清ちの長夜の灯の百

短夜
みしらぬやの屋に残る笠の露
夏月
太秦の木の林もうすなり夏の月
夏の月ぬるくしくもゆるる
国扇
光琳の ちらの時守り 古国扇

清水

焚る火釜菜を蒸す清水哉

蟬

蛭の口撥き蟬なく水みなも

蓮

豆腐ふる沙のいろさよ蓮の花

暑

あつき日や小庭の木陰迎へ

大蟻のたををあつまるあつさ哉

蜂

乃ちまを捧ふるさきぬをの蜂

夕さち

夕さちや火を焚る嶽の雲

納涼

あ母一丸きみるの月と栗と縛

ほこりふきすすき月の出一番

檀溪

すゝきに人の来ぬるす菴うち

丙午九月六日ゆきぬ谷の
ひまく雪をけを拾原のおく花を
孫ゝゝ四時のけしきひとゝして
のこるものれし何を別に仙境を
尋ぬる

小ゝゝ春の多さよ赤蕚の冬ゝみ

れ梅

南梅ゝゝゝ春ゝや花いろ花ぬ

宇洋輯